

## 浄土真宗の葬儀について

能代市 真宗大谷派 浄明寺住職 藤井 慶昭 師

各宗派の葬儀に関するシリーズも、これが最後となります。ビハラーセミナーとしては2度目のお招きとなる藤井さんにお話を頂戴しました。

いつもながらの痛快かつ示唆に富んだお話に、会場は笑いと共に真剣な面持ちで聞き入っておりました。

## 檀家制度と浄土真宗

徳川幕府が手っ取り早く安上がりに、そして確実に国民を支配する一つの方策として、俗に言う「檀家制度」というものを作りました。日本人は必ずどこかのお寺に所属しなければ駄目だという関係を結んだ。今ではもう過去帳しかありませんが、かつては現在帳、役所にある戸籍と同じく結婚しても子供が生まれても、旅行に行くにもみんなお寺への届けが必要だったのです。

日本人であり、この人はこういう秋田藩の鷹巣村の〇〇兵衛の三男坊だということを間違いなく証明してくれるのはお寺だったんですね。ですから旅に行く時は、寺の住職が発行した証明書を持って通行手形をもらい、それがなければ関所を通れなかったという形で、かつてお寺が今の市役所、役場の役目を果たしたわけです。

またその檀家制度というのはキリシタンを禁止、監視するために作られたとも言われています。徳川幕府はキリスト教を禁止しました。その信者がいないかどうか、あるいは信者になるかならないかを厳重に監視するために寺を利用したのです。

ある説によりますと、お盆に参る棚経は各檀家、家々を回る。確かにご先祖様を供養するという形をとっておりますが、あれは年に一回住職が直接檀家を回って、キリシタンでないかどうかを監視させることから始まったとも言われております。

檀家制度になった以上は葬儀、年忌法要を義務付けたのです。各藩や幕府から出している法令を見ると「檀家は寺の屋根が壊れたり土台が腐ったら直しなさい」「法事はちゃんと執行しなさい」というものがあるのです。

ところが真宗、いわゆる一向宗は檀家制度には組み入れられましたが、本格的に檀家の葬儀とか年忌法要をするようになったのは元禄に入ってからです。それまで一向宗というのは葬儀とか年忌法要に関わらなかったのです。その点、曹洞宗は特に早く葬儀とか年忌法要に関わり、それを通して非常に民衆に広まっていったという面があります。ですから葬儀とか年忌法要に関わった歴史は、曹洞宗と一向宗では約200年ぐらいの差があります。一向宗は儀式について言えば本当に新参者なのです。葬儀とか法事が始まったのは、ほんのこの前と言ってもいいのかも知れません。

また、一向宗というのは儀式を重視しない面があるのです。皆さんそう思いませんか？一向宗の葬儀にお参りした時、他宗、特に曹洞宗とでは違和感を感じませんか。一向宗だと簡単で、始まったと思ったら終わってしまったという感じで…。

ところが特に曹洞宗などの葬儀は、本当に厳粛にされる。時々知人などの葬儀で一般会葬者としてお参りさせていただく機会があります。こういう言い方は変ですが、いいなあと感じる時があります。例えば僧侶の歩き方一つ見ても、きちんと訓練を受けているというか修行をしているというか、形になってい

るなど驚く時があります。その点、我が宗派は歩き方一つ見ても締まりがない。そしてまた髪も伸ばしているの、袈裟の似合わないこと（笑）。つくづく思います、自分もそうです。

余談ですが、（能代市）長慶寺さんの先代住職が亡くなって葬儀がありました。向う三軒両隣りということで、そこに向かいが私で隣が日蓮宗、その脇の方が浄土宗です。その3ヶ寺に案内が来まして、葬儀の時に行きました。すると隣の日蓮宗の住職も葬儀だということで、その朝でしょう、きれいに髪を剃って来ていました。浄土宗の人も普段は伸ばしているのですが、その日だけは青々と剃ってきました。そして私だけ長かったのです。すると葬儀に来ている曹洞宗の方々、50人以上もいましたが皆さん青々としています。その中で私だけ髪を伸ばしているのです。普段は髪を伸ばしていても何とも思わなかった私が、あの5、60人の中に行ったら、その格好の悪いこと（笑）。皆私を見ているような感じがしまして、逃げ出したくなるような思いをしたことがあります。

そういうこと一つを取っても、一向宗というのは何となく儀式に合わないということをつくづく感じる時があります。そして僧の中にも儀式を軽視する、あまり重きを置かないという雰囲気、伝統的と言いますか、あることもまた事実です。そここのところを前提においていただきたいと思います。

### てつぎでら 「門徒」と「手次寺」

皆さん方、「あなたはどこの檀家ですか」「うちの菩提寺は〇〇です」という会話をしませんか。お寺の方から見れば皆さんは檀家であり、檀家側から見ればお寺は菩提寺なので、普通はこういう会話をするわけですが、本来、当方の宗派にはそういう呼び方がない

のです。今はみんな檀家というようになりましたが、本来であれば「門徒」、門徒から見れば寺は「手次寺」という言い方をします。

「うちの菩提寺」「うちの檀家」という言い方もありません。「うちの寺に所属するご門徒」であり、ご門徒から見れば「うちの手次寺」という言い方をするんですね。

どういう意味かと申しますと、真宗以外のお寺は言わば有力者の寄進によって、そういう人達の家族や先祖の菩提を弔うために建てられたのがほとんどです。ところが真宗に限っては、そういう例がないことはないのですが、ほとんどありません。真宗のお寺の歴史は宗祖親鸞の教えを共に聞いていくという道場から始まっているのです。5人、10人の人々が寄り集まって、親鸞の教えを聞いていこうという小グループが寺の発祥になっている。うちの門徒というのではなく、全部親鸞聖人のご門徒、本願寺のご門徒なのです。本当は直接手を結べばいいのですが、それを京都までとはいきませんので各地に親鸞聖人のお手次、中継ぎをする存在なんだと。こういう形で「手次寺」「門徒」という呼び名が出たわけです。

そしてこの親鸞聖人の教えを聞いた昔の人は、ほとんどはかつての身分社会の最底辺の人ばかりです。当時人間とは言われなかった、水呑み百姓あるいはそれさえもなれない最下層の人々によって支えられたのが真宗、一向宗です。

こういう言葉が昔からあります。－「天子天台公家真言、公方浄土大名禅、乞食日蓮門徒それ以下」－天子（天皇）は天台宗の信者、お公家さんは真言宗の信者、徳川家の菩提寺は浄土宗、大名の菩提寺はほとんどが曹洞宗か臨済宗、そして日蓮宗の信者が乞食、門徒の信者はそれ以下だという昔からの有名な言葉があります。このように我が宗派は、身分制度にも入らないような下層の身分の

人々によって支えられた教団です。

どうしてそういう人々によって支えられたかということ、親鸞の教えを一言で言えば、仏の前においては人間は全て平等なんだということです。そういう教えに大いなる救いを求めたのでしょう。

身分制度によって成り立っている社会の中で、人間が全て平等だということは社会の崩壊を招きます。人間は生まれながらにして尊い人は尊い、家柄の違う人は違う、だめな人は徹底的にだめなんだという、完全な身分階級制度です。それによって社会が成り立つ、社会の秩序が保たれている世の中で人間が平等などと言ったら、世の中を根底からひっくり返すことなのです。権力者から許されない危険思想です。戦前戦中、共産主義はまさに資本主義を崩壊させるとんでもない存在のアカだと言って徹底的に取り締まれたでしょう。それよりもっと厳しく取り締まれた。

徳川時代には280ぐらい藩がありました。ここは佐竹藩、その佐竹の菩提寺は天徳寺。280ある藩のうちの250ぐらいは曹洞宗か臨済宗の禅宗が菩提寺だと思います。歴史から言いますと280いくらの藩の中の一つの大名、あまり名前の聞いたことのない小さい大名で真宗の信者がおったそうです。しかしそれが世間に恥ずかしくて、表面は曹洞宗を菩提寺ということにし、隠れて門徒の教えを聞いていたという証拠があるそうです。身分あるものが親鸞の教えを聞いているのは恥ずかしいと、まことしやかに身分の高い人達にはあったぐらい、親鸞の教えを聞く人達は底辺にあったのです。

これからお話しするのは、あくまでも我が宗派の話ですので、そういうことを前提に聞いていただければと思います。更に付け加えるならば、同じ宗派でも土地によって、鷹巣と能代あるいは能代と秋田といえば同じ宗派でもまた儀式のしかたが少しずつ違います。

同じ能代でもお寺によって、住職の考え方によってだいぶ違うのです。

私は能代で変わり者で通ってまして、私は真面目なつもりですが他から見ればだいぶ変わっているのだそうです。そういうことで、これからお話するのはあくまで我が宗門の話であり、そしてその中でも能代の浄明寺という非常に狭い話ですので、そののところ足したり引いたり聞いて頂ければと思います。

### 葬儀の傾向

今、葬儀がどういう傾向を示しているかということ、私は三つあると思うのです。

葬儀の「簡略化」「盛大化」それから「バラエティ化」。簡素化ではありません。簡素化と簡略化は違います。簡略化・盛大化・バラエティ化というのは私のつけた名前ですが、そういう三つの大きな傾向になりつつあるのではないかと思います。

この頃の簡略化の一つの傾向として、「(葬儀は)故人の意思により、近親者のみにて行いました」という死亡広告が出ますね。私はそれを見ておかしいことをすると思うのです。近親者のみだったら、何も新聞に出さなくてもいいのではないのでしょうか。

「だからご失念ください」「気にかけてください」といわれてもすごく気にかかりますよね。本当に故人の意思によってその方がいいのであれば、近親者のみでささやかにやればいいのです。なぜ新聞に「行いました」と書くのでしょうか。あれを見た以上は「あの人の世話になった」「私の親の時に来てくれたのに」と思えば慌ててその後に皆駆けつけるものです。すると来られる方も二重三重の手間がかかる。故人の意思、故人の遺言というが、本当に遺言なのかわかりませんが、そこにも一つの矛盾があるのではないかと思います。それが一つの傾向です。

それからもう一つの傾向が盛大化。この頃葬儀を非常に派手に行っております。そしてその派手さの一つが葬儀業者の過剰なまでの介入だと思います。私は僧侶側も悪いと思うのです。この頃あまりにも葬儀業者が葬儀の中に入り込んで、亡くなってから付きっきりで何もかも全部世話をしているでしょう。そして寺側、僧侶側は業者に動かされて、単なる一場面の出演者ぐらいにしかとらえていない。徹底して葬儀業者が葬儀の中に、必要以上に食い込んでいるのではないかと。

ある業者の新聞広告ですが、「葬儀は心ゆくまで故人を思い巡らせる時間でなければならぬと考えております。〇〇が〇〇での会場葬をご用意するのもそうした思いから。全て会場内で行いますので冬期間の葬儀で気になる寒さがありません。また寒くて歩きにくい冬道を考慮して送迎バスの運行もしています。もちろん葬祭ディレクター、会場スタッフは喪主様から片時も離れず親身になってお世話いたします。喪主様、ご列席なさる方にじっくりご冥福をお祈りする時間を過ごしていただきたいと考えて生まれた〇〇でございます。」

皆さんはこれをどう思いますか。寒くなくゆっくりしてもらおうのだそうです。別の業者の広告には「当会場葬は冷暖房完備でゆっくりくつろいでご葬儀に参列していただけます」とありました。あまりにもひどいので私はすぐに電話しました。私は暇ですから、そういうのはすぐ電話するのです。「快適な場所で葬儀なんてどういうことか」と。冬道だから、寒いから、暑いから、足が痛いから。これは参列者、我々一人一人がわがまま、贅沢になっているのです。寒いといやだ、暑いといやだ、足が痛い。葬儀というものはそういうものでしょうか。今は電話一本で業者が全部やってくれます。そしてその会場でやった時は喪主側までお客様として座っているで

しょう。金さえ出せばみんなやってくれる、秋田市では喪主の挨拶もしてくれるのですよ、泣きながら（笑）。そして僧侶は何をしているかというところ「ここで出てください、ここで引込んでください」と業者から指示されて出たり入ったりしている、一つの葬儀というセレモニー、イベントの出演者ではないのです。それを我々は許しているのです。ここに私は問題があるのではないかと。

都会あたりではもう既に、坊主などというものは全く業者の言いなりです。それを今地方の業者も狙っているのです。そして葬儀ディレクターと称して一から全部演出していくという、式次第全てを葬儀業者がほとんど牛耳っているのです。この地方はまだそこまでいっていないようですし、そのお寺によっても違うと思いますが。

葬儀というものが一つのセレモニーになりイベントになっているのです。葬儀というものは何かという、その本来の意義が完全に消失してしまっている。ですから名前もセレモニーセンターとかになっているでしょう。

ある業者が葬儀展示会をすると今日の新聞に出ていました。どういう祭壇がいいかというのを前もって、皆さんご注文しましょうというのだそうです。そして葬祭ディレクターと称する、通産省かどこかの許可がいるらしいですね。そういう葬儀業者の過剰なまでの進出。それを座視している寺側、我々側の責任だと思いますが、そういうことも考えていかなければならないのではと思うのです。

それからもう一つのバラエティ化。葬儀が一つの催しとなってしまっている。この人は音楽が好きだったから音楽葬にしようとか、この人はそういう宗教色をやめてみんなで集まってお別れ会をしようとか。

ですからいったい葬儀というものは何なのか。皆さん方は葬儀といますか？葬式といますか？なぜこうなったかと言いますと

「葬儀」が「葬式」になってしまったのです。「儀」が抜けてしまったのです。本当であれば「葬儀式」といいます。あらゆる儀式から「儀」が抜けてしまったのです。卒業儀式から「儀」が抜けたので「卒業式」になってしまった。

ですから卒業の儀式という意味よりも、校長先生が間違いなく一人一人に卒業証書を渡すのを、一分一秒の時間も間違いなく形だけやることを練習するでしょう。何日も前から何回も練習します。卒業儀式が卒業式になったのです。卒業儀式、卒業式という儀式は何かという本来の意味が欠落し、そして滞りなく形通り式が通ればいいということになってしまったのです。卒業式、入学式、結婚式も「儀」が抜けてしまったでしょう。今は結婚式そのものよりも披露宴の方が一生懸命でしょう。披露宴は本来は付け足しなのです。本来の披露宴は、結婚の儀式をして二人が夫婦になりました、そのことを皆さん方にご披露するという付け足しなのです。それが儀式そのものの内容はいい加減で、その二の次という披露宴が大きくなってしまった。

喪主、遺族の人達は葬儀をどうしますかというよりも、引き出物は何にしたらいいか、酒はどうやって温めたらよいか、そっちの方が忙しくて儀式にお参りする暇がないのです。そういう形で葬儀式から「儀」が抜けてしまって葬式になってしまったのです。儀というのは、その式の意味、内容、願い、目的、何のために葬儀をやるのか、何のために結婚式をやるのか、結婚式というのとは一体どういう意味なのか、どういう願いがあり、どういう目的であるのかということなのです。その「儀」がみんな抜けてしまって式になった。だから単なるイベント、セレモニーになったのです。

内容とかそういうものはどうでもいい、滞りなく1時に始まったら2時に終わって2時半か



ら御斎（おとき）に座れるように葬祭ディレクターがやってくれるだけの話です。そして式そのものが全て、一過性の儀礼になってしまった。

まさに我々僧侶の職務怠慢です。職場放棄、責任回避です。人ごとみたいな話し方をしていますが、みんな我々僧侶の責任なのです。私達は僧としての責任を果たしていない。そしてそれを全部葬儀業者に肩代わりさせて、その業者が指揮する式の単なる一部分の出演者に成り下がってしまったということが、葬儀そのものが葬式になってしまったということが言えるのではないのでしょうか。

### 真の「葬式仏教」とは

数日前の朝日新聞の読者欄で、池田重行、千葉県船橋市の69歳の人ですが、「元々お坊さんの仕事は人々の苦しみ、悩みを救済することだった。それが葬式仏教と言われるように、出番は死者の弔いと高額な戒名付けがもっばらになった。無論そんな僧侶ばかりではないだろうが、実際に看板を掲げて人々の魂の救済に乗り出しているのは極わずかだといふから、本当にお坊さんだと思える人は少ないだろう。少ないかもしれないが、お経の勉強会を開き、説教を続け、檀家の人達の相談にのっているお坊さんを知っている。お坊さんも現代人の多様な悩みに対応できるような勉強を普段に心がけることが必要だと思

う。本山での修行中に適格者を選んで就任させるべきではないか。寺の世襲も見直さなくてはいけないのではないか」という厳しい意見を述べておりました。まさに皆さん方の思いはみなこうだと思います。腹の中ではみんな拍手しているのではないかと思います。

よく私達のことを厳しく批判する時に、「今の仏教なんて葬式仏教だ」「葬式坊主だ」と皆さんは言いますが、私はある意味ではお褒めの言葉だと思うのです。葬式仏教、葬式坊主だと言われるが、本当にその葬式を真剣にやっているか、葬式坊主と言われるほどのことをやっているかということです。葬式坊主だと呼ばれるのは名誉です。葬式そのものに命をかける、葬式そのものを全力で私の仕事としてやっているという、そのことが厳しく問われているのではないのかなと思うのです。

世襲制の問題もそうでしょう。寺に生まれたからやる気もないのに、単なる就職先として継ぐ。だからこのように厳しく言われてしまうのでしょうか。かつて世襲制というのは当宗派だけだったのですが、この頃は他宗の方もみんな世襲制になりました。これも時代の流れなのでしょう。それでもこの頃は、寺の息子が寺を出て、そして本当に仏教に関心を持ち、そういう仕事につきたいという人が宗門の学校に入って、寺に入りたいという人も増えてきました。非常にいいことだと思います。本来そうあるべきなのですが、それもまた一つの傾向として、そこに日本仏教の救いと申しましょうか、何らかのささやかな光明が、そういうところにも探していかなければならないのではないかなと思うのですが、いかがでしょうか。

葬儀という本来の「儀」が欠落し消滅して意味のない簡略化とか盛大化とか、バラエティ化してしまった。そういう葬式にどうやって「儀」を取り戻すか。いわゆる葬儀の

「本来化」です。僧侶がこれを今見失ったら、本当に自分の立場を根底から、世間から批判されてもしかたがないと思うのです。

## 葬の本来化

それでは「葬の本来化」とは何かということではありますが、例えば皆さん方は葬儀の時に必ず祭壇を飾るわけですが、あの祭壇の一番上に紙で作った花飾りがあがりますね。これはどの宗派も関係なく、必ず祭壇の上段に飾ります。今は葬儀業者がきれいに作って持ってきますが、昔は亡くなって枕経に行きますと親戚の人が作って大根を輪切りにして刺して、飾ったものです。

あれを「シカバナ」といいまして、「紙化花」と「四華花」二つの書き方があります。昔は亡くなるとまず親戚の人がきて、何があんでも一番先にシカバナを作って、亡くなった方の枕辺にお飾りしたものでしょう。今でも必ず宗派に関係なく祭壇の一番上段にシカバナを飾ります。今は金色にしてみたり銀色にしてみたり、あれも業者が作ったのでしょうか。私のところでは禁止しています。金や銀のシカバナなどあるはずがないのです。

あれはなぜ、宗派に関係なく必ず祭壇に上がるかということ、宗派によってはその解釈の仕方が違うのかもしれませんが、こういう伝説があるのだそうです。

お釈迦様が80歳の生涯を終えて亡くなられたことを「涅槃に入られた」と言いますが、その涅槃の時に人間はもちろんのこと動物も植物も皆嘆き悲しんだということです。そしてちょうどお釈迦様が亡くなられた枕辺にインドの花で沙羅という木が生えていたそうです。その沙羅の木は、幹が途中から大きく2つに分かれており、まるで双子のような木です。その双樹といいます。「沙羅双樹」と言いますと皆様ご存知の平家物語に「祇園精舎の

鐘の声、諸行無常の響きあり。“沙羅双樹”の花の色、盛者必衰の理を顕わす」とあります。その沙羅双樹がお釈迦様の亡くなられた枕もとに生えていて、お釈迦様が亡くなられて本当に深く嘆き悲しんだ。あまりの悲しさ、嘆きのあまり双子の片方が真っ白に枯れてしまった。しかしそれから双子の残った片方はいよいよ見事な花を付け、実を付け、天を突くような大樹になったという伝説です。

根っこが一つで途中から二つに幹が分かれている双子。双子が元気な時はその根っこから上がってきた栄養分は全部二つに分かれます。ところが片方が枯れる、死ぬことによってそれまで分かっていた様々な栄養分、エネルギーが残った方に全部いきます。片方が枯れることによって片方が栄えていく、これを一枯一栄といいます。

それがどうして祭壇の上に飾られるようになったのか。それは一人の死という、その悲しさ、無念さ、それらを通して残された者はその死というものから大いなるものを学んでほしい。私は枯れていくが、この私との別れを通し、その死というものの事実から生きるということ、命というものを仏法に聞いてほしい。今までは生きるなどということは当たり前で、命があるのは当たり前だと思っていた。そのようにのん気に構えていた私に、人間の命というのはいつ終えるか判らない、そしてその死というものがどれほど関わる者に悲しみと無念さと苦しみを与えるか。その苦しみ悲しみを決して無駄にしないで、むしろ私の死というこの悲しみ、枯れていく一枯を通して残された者が栄えてほしい。こういう故人からの深い深い願いの場、これが祭壇の前なのです。

もし皆さん方が、あの祭壇というのは何のため、誰のためにお飾りしているのかと聞かれたら何と答えるのでしょうか。恐らく多くの方が、亡くなった人を弔うためにあるのじゃ

ないかと言うでしょう。確かにそれはそうです。しかしあの祭壇というものが100%亡くなった人のためにあるならば、戒名や法名やお骨や写真をあっちに置いて、皆あっちに向けて飾ればいいではないですか。祭壇をこっちに向けて、戒名も法名もお骨も写真も、そして頂いたお供物やお花までみんなお参りするこっちを向いているではないですか。どうしてこうなのかと思ったことはありませんか。亡くなった人にあげたお花だから、みんなあっちの方を向けたらいいではないかと思ったことはありませんか。

祭壇のお飾り一つを見ても、結局あれは何のために誰のためにお飾りをしているのか、こういうことを考えると確かにそれは亡くなった人とお別れの場で、そこでお弔いをするのだ、お別れをするのだという場でもありましょう。

しかしそれと同時に亡くなった人から、「私は枯れていくが、その枯れるという悲しみを通して生きている者達よ、その悲しみを深い縁として仏法に縁を結んでほしい、仏の教えを聞いてほしい、宗祖の教えに耳を傾けてほしい。そしてあなた達の生きている命というものを、人生というものを深めてほしい」。そういう故人からの、仏様からの深い深い願いがかけられた、いわば故人から生きてお参りする者への声なき声が、声なき会話を交わされる場、それが葬儀の場なのです。

ですから葬儀というものは100%、亡くなった人を生きている者が送って差し上げる、供養するという死者儀礼だけではない。送るといふ悲しみ、別れなければならないという無念さを通して、一枯一栄、それを深いご縁として仏法聴聞、お釈迦様の教え、各宗派の祖師、ご開山の教えを聞いていく。そういうご縁にしてもらいたいという故人からの声なき声を聞かせていただく場なのです。それが葬儀の「儀」なのです。



そういう願いや意味、目的が欠落したものでから単なる式になってしまった。ですから終われば、「やれやれ」です。葬儀とか法事というものは終わった時が発発なのです。そうでないと単なる儀礼でしょう。何の意味もない。こういう言葉があります。「ひとりの人の死は悲しい。しかし残された我らがその死に何も学ばず、何一つ新しいものを見いだせなかったならば、それはもっと悲しい」。ひとりの人間を失う、別れねばならないというのは本当に悲しい、辛いことです。しかしその悲しさが生きている、残された者にとって何の意味もなかったのならば、亡くなった人は無駄死にだったということです。もし生きている者が、そういう悲しい死に何も学ばなかった、自分の人生にとって何の意味もなかった、時間とともに薄れ、やがて忘却の彼方に消え去っていく、そういう関係しかなかったのならば、ひとりの人間の死は悲しいことだが、その死を無駄にしてしまった、何も意味のない存在にしてしまった、これほど悲しいことがあるだろうか。まさに生きている私達に対する深い深い問いです。

葬儀というものは悲しい死、無念なる死を通して、ひとりの人が命を終えて枯れていく、しかしその悲しみを得がたい、尊い呼びかけとして我が人生を広く、大きく、深めていく、そういうチャンスにしてほしいという、故人からの大いなる呼びかけである。その呼びかけにどう応えていくかという、その

声なき声の会話の場が祭壇の前であり、そのことをあらためて参列者一人ひとりが我が身に問う場が葬儀という場なのです。

それが「儀」が完全に欠落してしまい、いかに滞りなく、手落ちなく、スムーズに格好よく、そして楽に。お参りする人が足が痛くないように、寒くないように暑くないようにと、そういうわがまま、贅沢、身勝手な形で私達は葬儀というものを葬式にしてしまったのではないのでしょうか。

### 清めの塩と六曜

葬儀は別の面から見ると、どうとらえられているか。不浄とか不吉とか、そういう形でとらえていませんか。ですから葬儀へ行くと塩をまくでしょう。あれを清めの塩と言います。清めるというのは汚れたということでしょう。

葬儀で辛い、悲しいと言いながら、その厳粛なわが身の人生を教えてくれる、一枯一栄の尊い場を不浄な、不吉な場として塩をまかなければならない。その塩をまくという行為がどれほど故人を冒瀆しているものなのか。仏教には本来、不浄とか不吉というものがあるはずはないのです。死という悲しい別れは我々に仏法を聞く縁を与えてくれる尊い場なのです。その尊い場を不浄なる場、不吉なる場として塩をまいて清めねばならないということが、その行為をする者の愚かな行為であり、その愚かな行為がどれほど故人を冒瀆しているかということです。

これも宗派によっては温度差がありますが、六曜にも少しふれておきます。友引とか大安とかという。これは鎌倉時代の中期から後期にかけて中国から朝鮮を通して日本に入ってきた。そして室町あたりまで広まったのですが、その間に中国や朝鮮ではこういうものは何の意味もないということで全部廃止



してなくなりました。日本では陰陽師とか易学とか、特殊な人には広まりましたが、一般には全く広まらないで忘れられたような状態になっておりました。

それが少し話題になったのが幕末です。幕末にヤクザが博打をうつ時に、今日はどう出ていくかといった時に先勝、先負、友引。友引というのは共に引く、あいこ・引き分けという意味です、勝負なしです。

赤口というのは、「シャッコウ」という読み方さえ分からなくなっている。ではどういう意味があるのかというと、それもわからない。それで後から、「赤」という文字が使われているので、赤はお祝いではないかと解釈したのです。そうしたらある人が、赤は血なので、血は不吉だからよくないのだと言う。どっちをとったらいいのかわからない。

それらが口々に広まりまして、そして一般国民にも広まったのが戦後です。戦後どの家にもカレンダーが出るようになりました。それである六曜が、大安でなければ出来ない結婚式、そういうように後からこじつけて、人間の方が振り回されている。

少し古い話ですが、昭和58年5月26日が何の日かご存知ですか。日本海中部地震です。あの日は大安吉日だったのです。それで能代の料亭やホテルでは結婚式があちこちで行っていて、すると地震が起こって能代の港では80何人死んだのです。どうして大安吉日に人が死ぬのですか。大安吉日を調べてみてください。「多いに安らか全て良し」と書いてあります。そうすると世界中全部いいことばかりのはずです。

大安吉日の日だから目出たいといって結婚している人がいる一方で、あの日に想像も出来ない地震がきて、80何人があつという間に命を落としているわけでしょう。遺族にとっては大凶の日です。その人によって大安吉日だといい、また別の人にとっては大切な夫や

父親の命日の日になってしまいました。「吉凶は人にありて日にあらず」、吉凶というのはそういう日があるのではなく、そういう迷信に振り回されている人そのものなのです。それが深い迷いであります。その迷いから覚めよとって教えられたのがお釈迦様の教えでありましょう。それを仏教教団そのものでそのことを是認して、塩をまいてみたり、いろいろなことをやっているのです。

### 死にまつわる迷信

鷹巣にもうちのご門徒が16、7軒、八森とか八竜、森岳、金光寺とか、地域地域にご門徒さんがおられますが、私が寺に帰ってきたのは昭和40年代、その年頃、驚くべきことが続いたのです。

どういうことかと申しますと、これは八竜方面でした。お葬式が終わって納骨に行く時に喪主がお骨を抱える。そして皆、夏でも冬でもワラジを履くのです。お墓が近づいてくるとそのワラジを蹴るのです。またしばらくするとまた蹴るのです。私は初めてなので何をやっているのですかと聞いたら、「亡くなった人が足跡をたどって家に帰ってこないように、足跡を消すのです」と言いました。これがまず一つ。

それから金光寺方面に行った時、お葬儀が終わってお骨を納めて帰ろうとしたら2、3人の人が荒縄でお墓をぐるぐると結び出したのです。何をやっているのかと聞くと、「縛って出てこないようにした」と言いました。

そして八森方面では、お墓のあちこちに電気がついているのです。墓のあたりに差し込みがあちこちにあつて、お骨を納めて一番近い差込みから持ってきて電気をつけるのです。何ですかと聞いたら、「墓を明るくしておく、暗い自分の家には戻ってこないだろう」と言うのです。それからもう一つは、納

める前に喪主がお骨を持ってお墓の前でぐるぐる回るので。何をしているのかと聞いたら、「亡くなった人の目を回させているのだ」と言うのです。それで故人が家に帰れないようにしているのです。まさか今はそういうことはないでしょうが、かつてそういうことがありました。

2、3年前にある所でそういう話をしたら、「うちの方は、住職が納骨をする前に回れといますよ」と言われて驚いたことがありました。

目を回すにしても、草履を放り出すにしても、縄で縛るにしても、電気をつけるにしても、それは今まで共に生活してきた夫婦、親子とやってきた人が死ということを境に、もう恐ろしい存在にしてしまうのです。なんと薄情なことではないですか。

私の寺では、納骨をする時は出来るだけ多くの人に立ち会ってもらい、そして立ち会った全ての人に、一人ずつお骨に直接手を触れていただいて、みんなでお骨をお墓に入れてもらうのです。そして帰ってきて話をします。「皆さんはお骨に手を触れたなどというのは、恐らく初めての方ばかりでしょう。箸は絶対使ってもらわないようにして、直接触れてもらうのです。そしてあのお骨に触れた感触を生涯忘れないでほしいのです。あの感触は明日の我が身なのだ、たまたま今回我々は送る立場であり、納める側の立場に立ったが、これが逆になっても何の不思議もないのだ。あくまでも納める者と納められる側の立場はたまたまであるのだ。命のはかなさ、死という大切な人との別れを通して、わが身の命のあることのありがたさ、命の尊さを知っていただく貴重な場なのです」と。

しかし私達は納骨というと、もう恐怖の対象です。気持ち悪いからいやだと。だいぶ前ですが、祖父の葬儀に東京から息子夫婦がきました。葬儀といっても、子供達は無邪気だ

からお墓のまわりをぐるぐる回って遊んでいるのです。「坊や、次は君の番だよ。おじいちゃんのお骨をちゃんと拾いなさい」と言って、お骨に子供が手を触れようとしたら、その母親が「汚いからやめなさい」と怒ったのです。どうなったと思いますか、このおとなしい私が（笑）。それからもう修羅場ですよ。いったいどっちが汚いのだ！と。

どうして遺骨が怖いのですか。あれは「おこつ」って言うから怖いのです。「ほね」と言えば怖くないですね。皆さんも骨がありますから。焼くと怖くなるものなのではないですか。骨というのは怖いものなのですか。

余談ばかりですが、うちの女房は一サラリーマンの娘です。母親から聞いたら、昼間でも寺の前を歩いたり、墓を見たりすると震えあがるような意気地なしだったそうです。それが私に惚れて（笑）、そういう女性が寺にきて、寺の生活を通して世間で寺が怖いとか幽霊が出るとか崇るとか、霊がどうだとかというのは、いかにでたらめなことであるかということ身をしみて感じたそうです。自分もそう思っていたのでしょうか。

私の祖母は寺に生まれ、寺に嫁いできて81歳。私の母は寺に生まれて寺にいて72歳。子供の頃その祖母や母親に幽霊はいるものかと聞くと、「馬鹿じゃないか、どこに幽霊なんているものか」と言われました。そこに住んでいる私達が、そんなことは微塵も感じたことはないです。どうですか、他の住職さんなら。そういう怪しげな、これが霊じゃないか





とか感じたことはありますか。

実は幽霊というのはいるのです、本当は。どこにいるかという、いるという人にはいるのです。私はいないと思っているから、幽霊の方でも呆れて出てこないのです。怖いとびくびくしていると、ちょっとしたことでもびっくりするでしょう。あれと同じです。怖い人には出てくる、いると思う人にはいるのです。ですから私のようにいないと思っている人には出てきようがないのです。

そういう形で私達は死というものを、本当は自分の深いご縁のある人の死というものは悲しいこと、辛いこと、無念なことである。しかしその事実というものを避けようと思ったり逃げようとしても、ごまかそうとしてもごまかしようがない。まさに目の前にある事実なのです。その事実から一体我々は何を教えていただくか。その死というものを通して私は何を教えてもらえるか。そのことが葬儀という意義であり、私達生きている者が本当に亡くなった人に一体何をしてあげられるのかというのか。

よくご供養という言葉を使いますが、立派な、盛大なご葬儀をやるのもそれはご供養になるのでしょうか。立派なお墓を作ってやるのもご供養になるのかもしれませんが。年忌法要をきちっとするのもご供養になるでしょう。

しかし最大の、最善のご供養というのは、その亡くなった人の死を無駄にしないということです。あの別れは辛いことであったが、

あの辛い別れが私にとって人生というもの大きく開いた、物事というものを深く考える、そして深いご縁として仏様の教えを聞く身にもなった。私自身が深まる、まさに一枯一栄、大切な人は枯れて死にいったがそのご縁で、そのおかげで、私はここにこうして充実した人生を送れるのだという、そのことをもし私達生きている者が一人ひとり感じることができるのならば、それこそが最大のご供養になるのでしょうか。悲しい死が我が人生にとって大いなる糧になったのだ、生きている者の責任でしょう。そういうことをあらためて知らされ、あらためて自らも覚悟をし、そのことを心にきざみ、身を呈して、それからの人生をスタートする場が葬儀でしょう。

ひとりの人間の死は悲しい、しかし残された我らがその死から何も学ばず、何一つ新しいものを見いだせなかったのならば、亡くなった人を無駄にさせる。このことこそ悲しい辛いものはない。悲しい、辛いことを私の人生の大いなる糧にしていくのだと。それこそが、私は故人に対する最大のご供養なのではないかと思います。

そういう葬儀の場にしていけるかどうか、葬式ではなく葬儀なのだ。そういう葬式の場を葬儀の場に私らが回復することができるかどうかということが、これからの日本仏教の将来であり、我々僧侶の責任ではないでしょうか。そういうことも実は深く問われているのではないかと、思うのですが。

いろいろ一人で興奮して話してしまっただけ申し訳ありません。本当は普段は無口でおとなしいのですが、つい興奮して、いつものとおりでございます。最後までご静聴くださいまして、本当にありがとうございました。

### 質疑応答

【フロア】お線香の立て方なのですが、宗

派によっては立てると横にするのとあると思うのですが、それはどういった派があるのですか。私は藤井さんのお母様が亡くなった時にお参りしたことがあって、私達は曹洞宗でちょっと戸惑ったのですが、お水などもあげないですよ。

【講師】水をあげないというのも、場所によってはあげるところもありますがね。いろいろですが、基本的にはあげないということ。水そのものの意味をどのようにとるかによって違うと思うのです。私達が水をあげないというものの水と、ちょっと意味が違うのではないかと。私達の方は、水というのは死に水というような取り方をしているのです。死に水というのは、あくまでも本当に親しい人がすることであり、他の人は遠慮する方が作法、礼儀なのだということでお水をあげる必要はないのだという形をとっています。おそらく曹洞宗ではそういう意味の水ではないと思います。

線香もまた全然違いまして線香、焼香、いろいろありますが、線香というのは、本来であれば火種に香を薫るのが元々なのでしょう。それが後世、火種と香を一緒にして棒状にしたのが線香なのではないでしょうか。ですから歴史的に一番古いのは香ですね。うちの宗派は、あくまでも線香というものは、普段は火種に使う。線香を折って香炉に横にして入れて、そこに香を薫るといふ、火種という意味の方が強いのです。他宗の法は線香そのものをあげるのだということになると思いますから。

【袴田】浄土真宗さんのお葬儀というのは、どのように進んでいくのですか。

【講師】葬儀のお勤めは正信偈と申しまして、これはお経ではないのです。宗祖の親鸞聖人が、その念仏の教えを膨大な量で書いて

おりますが、その教えを凝縮して一つの賛歌を作ったのです。お釈迦様の教えを伝えてきた高僧の人達、そしてそれを聞く我々の喜び、そういうものを60行、120句の歌にして節をつけるのですが、その短い中に念仏の教え、他力の教え、親鸞の教え、そしてお釈迦様の教えが全部含まれているのだと。それをみんなで唱和する。それは亡くなった人を弔うというよりも、葬儀というものを縁として、その教えを聞いていく場なのだ。まあ、やっていることは皆、業者に牛耳られてやっています。お恥ずかしい事実ですが。

しかし葬儀そのものの願い、目的は、先ほどお話ししましたが、あくまでもそういう悲しみを通して、その悲しみの場がその法を聞く場になっていく、そういう場にしなければならないのだ、ということです。

なかなか一緒に声を出してくれる人も少ないですが、今私は葬儀の時にみんな一緒にあげられる本を用意しまして、それを参列者全員に持ってもらい、出来るだけみんなでそれを唱和する。そういう形にしています。

これからいろいろ、改良していくつもりです。例えば私達の着ける袈裟、衣にしてもちろんどん屋みたいなああいうものが果たしてどうなのか、そういうものから少しずつ改良していきたいと思ひ、やっているところです。

小さなことなのですが、例えばうちの方は弔電披露というものはやめてもらっています。弔電というものはあくまでも喪主がありがたくいただいております。あれを何も時間をかけてみんなに披露する必要はないのです。そういう時間があれば、何かみんなで考えてもらえる時間に使った方がいいので、少なくとも弔電披露は私の方では一切お断りしております。

弔辞の方もできるだけご遠慮してもらっています。美辞麗句を並べ立てる長々とした弔辞より、お孫さんの心のこもったお別れの言

葉の方をお願いしたり。細かいことを言えば、葬儀といえば司会者を立てますが、それも業者は一切私の方では断っています。上手下手は一切関係ない、親戚や友人、ご近所の誰かに司会をやってもらう。無論、業者がやるべきことは業者にお願いしてやってもらいます。しかしそれ以上のことは、可能な限り業者の方から手を引いてもらって、そして親戚や近所の方が手をかけて苦勞して、そして遺族、喪主は葬儀が終わったら疲労困ぱいのようにならなくちゃだめです。ところによっては喪主が青竹をついたものでしょう。あれも一つのパフォーマンスですがね。

それはなぜかという、看病から葬儀の準備から今日まで、喪主・遺族は疲労困ぱいして、立っている力もないということなのです。今は事前に美容院に行き、着付けをしてもらう余裕がある。いったい葬儀というものをどうとらえているのか、ということに突き当たると思うのです。本来であれば葬儀というものに全力を尽くすべきなのです。それを全部業者に任せて、喪主・遺族までが一般会葬者になってしまい、本来の儀が徹底的に欠落してしまう。だからといって昔のようにやれというのは無理な話だと思います。やはり時代の流れがありますから、そういうわけにはいきませんか、少なくとも葬儀というものはいったい何をやる場かという原点までは返らなければならないのではないかと思います。そしてそのことを先頭に立ってやらねばならないのが、我々僧侶の仕事ではないかと。またそういうことをあらためて言わなければならないほど、我々は職務を放棄しているということです。

【フロア】念仏ということについて。

【講師】真宗から念仏をとったら何もなくなります。真宗は念仏宗ですから。すべて念仏に尽きる、そして念仏から始まるのですか

ら。ただ、念仏といってもいろいろな念仏がありまして、天台宗でも念仏を言います。時宗という宗派がございますが、それも念仏があります。そして親鸞の念仏。念仏といっても天地の差があるほど、捉え方に違いがありますので、一概に念仏の意味するものがその教えによって根底から違いますので、これはまた一つ機会があったらお話しできればと思います。

【フロア】真宗さんでいう法名、私達でいう戒名について。

【講師】真宗以外は全部戒名といいます。法名というのは真宗だけ。法名というのは、男は釈〇〇と釈の下に2字、女は釈尼〇〇。もちろん釈というのはお釈迦様の釈でして、釈尊のお弟子になるという意味です。法名をもらうのは亡くなってからということになっていますが、あれは生きている時にいただくのが本当でして、生きている間に法名をいただく運動を本山を中心になって一生懸命しております。本山に行っているいろいろな研修を受けて法名を受ける。

法名を受けるというのは、一生懸命頑張つて、その資格として法名をいただくのではなく、ご縁があつてこれから親鸞聖人、お釈迦様の教えを聞いていきますという出発の確認をした人に与えられるもの、釈迦の弟子になるという名乗りです。今までは亡くなるということをご縁にしていたましたが、できれば生きている間に法名をいただいて、生涯お釈迦様の教え、親鸞の教えを聞いていくというスタートの場に立ったという覚悟の表れが法名の意味です。

# とびっくす

## ビハーラ公開講座開催 5月7日 鷹巣阿仁広域交流センター

講師：田代俊孝師（同朋大学教授・名古屋大学医学部倫理委員）

### 死 そして生を考える

— がん、ターミナルケア、そしてビハーラ —



今年度のビハーラ公開講座が上記日時にて行われ、約150人のご来場をいただき盛会裡に開催されました。

この度の講師の田代俊孝師は、真宗大谷派・行順寺住職として、また「死そして生

を考える研究会」代表としてビハーラ活動を推進されている方です。

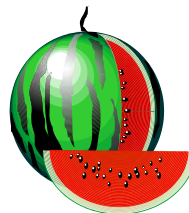
数多くのターミナルケアの現場事例をもとに、気さくな口調ながらサブタイトルにもあるようにあらためてがんやターミナルケア、そしてビハーラとは何かを考えさせられる貴重なお話を頂戴しました。



当日はJA葬祭センターはじめ多くの方々のご協力をいただき、誠にありがとうございました。また連休明けの何かとご多用の中お越しいただいた皆様にも、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。



# インフォメーション



## ☆ 日本ホスピス・在宅ケア研究会 全国大会 in 福島

日 時：平成16年9月11日（土）・12日（日）  
会 場：郡山市民文化センター（福島県郡山市堤下1-2）  
参加費：前売券（2日間）4,000円 当日参加（2日間）5,000円  
1日参加 3,000円  
※事前参加申込の締切は8月10日（火）まで

### プログラム

講 演：日野原重明氏・柳田邦男氏・山折哲雄氏・高木慶子氏  
対 談：鎌田實氏・山崎章郎氏  
シンポジウム：玄侑宗久氏・島津慈道氏・溝口俊夫氏  
特別企画：〈グリーンケアを考える〉佐藤初女氏  
討 論：市民部会/看護部会/子ども共育部会/哲学茶屋/模擬倫理委員会/  
スピリチュアル部会 など

お問い合わせ 同大会実行委員会事務局/福島県立医科大麻酔科内 鈴木雅夫  
Tel 090-3753-7698 FAX 024-548-0828  
日本ホスピス・在宅ケア研究会ホームページ  
[www.hospice.jp/](http://www.hospice.jp/)

何とも豪華な面々が揃った研究会です。遠く郡山での開催ですが関心を持たれた方、詳しい内容を知りたい方、また参加ご希望の方は当会の袴田代表もしくはレポート編集・新川まで。

## じゅかいえ 報恩大授戒会 参加者募集

日時 10月18日～22日  
会場 長慶寺（能代市萩の台）  
戒金 正戒 四万円・因脈 一万円

大本山総持寺副貫首 斎藤信義老師を戒師として、正式にお釈迦さまのお弟子になってお血脈をいただく曹洞宗門最高の法要です。

五日間のご参加が困難な場合、「因脈」といって一日だけでも参加できます。

仏教徒としての自覚を深める良い機会ですので、ぜひご参加下さい。

最寄りの曹洞宗寺院までお申し込み、お問い合わせ下さい。



# ぶっく れびゅう **BOOK REVIEW**



じゃくじょう

■ ■ ■ **雄**

— ボランティアが未来を変える  
NGOが世界を変える —

**著者 有馬 実成**

アカデミア出版会 2,700円＋税

本誌でも度々ご紹介した有馬実成師の“遺稿集”である。SVA（シャンティ国際ボランティア会、旧称曹洞宗国際ボランティア会）専務理事として、またNGO活動推進センター(JANIC)理事長等を歴任し、我が国のNGO活動を牽引してこられた有馬師が、各所に執筆した原稿を編集して上梓された。

平成12年9月18日に享年65歳で遷化（逝去）されるまで、自坊である山口県徳山市（現在の周南市）と東京、そしてタイ・カンボジア等のアジア諸国、更に阪神・淡路大震災以降は被災地神戸とを東奔西走された、師の卓越したボランティア理念に裏打ちされた多くの経験が随所にちりばめられている。

「国際貢献」というと、遠くの誰かのための活動と捉えられがちだが、一方的な支援に止まらずにその取り組みから国内の、あるいは自分の地域の問題点につなげ、自身の問題として何を学び、何を行動するかという眼差しを早くから持っていたことが特筆される。

師はボランティア活動やNGO組織の原点として、特に鎌倉時代の僧である叡尊(1201～1290)や重源(1121～1206)に重きを置かれていた。自身が仏教者として、いかに地域社会に

貢献するかの重要な手がかりを、彼らに求めていたかが本書でも詳しく述べられている。

若いボランティア達から「有馬学校」とも称されたように、師が日本やアジアの歴史・文化・民俗にも精通しておられたことは断片的にも知っていたつもりだったが、あらためて本書からそのことがボランティア活動を展開していく上で、いかに重要かを思い知らされた。

亡くなる十日前、結果的に最後のインタビューとなった時、当初はごく短いもの予定が話し出したら止まらなかったのも、師が我が国の、そして世界の現実を動かす力としての「夢」と「ロマン」を人一倍持ち合わせていたからであろう。

遷化から4年、私共が有馬師から学ぶべきことはまだまだ多く、その理念や経験を将来にわたって生かしていかなければならない。そのことを実感させられる一冊である。

